



第9回目は…
中尾 貞弘さん
(2区)

小学生の頃の春休みは、ウナギ捕りに忙しい毎日を送っていました。午前中は「しょうけ」を片手にクリークヘエサになるドジョウを捕りに行き、あの頃はクリークの水もきれいでドジョウがたくさんいました。泥だらけで帰ってくるところで一度着替えをしました。夕方「ウナギばえ」を仕掛けて、その夜は気持ちが高ぶってなかなか寝つけませんでした。翌朝、いよいよ仕掛けを上げに行くと糸がピンと張ってヨシの根元に何か引っかかっています。ウナギだと思って寒い朝にパンツひとつで入り、ものの見事に外れた時の寒さは今でも覚えています。たまにウナギが掛かっていたりすると天下を取ったように道の真ん中を堂々と帰って「ほら、釣れたよ」と自慢げに母に高々とウナギを見せていました。その夜のおかずは…。

夏は、親たちが堀に竹囲いをしてくれて、その中で泳いでいました。父兄が当番で監視をしていてくれました。早津江川からの「アオ取水」でこれが大変濁っていて今思うとよくもあの水で泳いでいたものだと思います。高学年になると親の目を盗んでは筑後川や早津江川でも泳いでいました。潮が引いてからは、シジミ貝を捕って、みそ汁にして食べていました。

秋は、稲刈りが始まります。当時は何もかも手作業で大変な仕事でした。私たちも学校から帰ると田んぼへ行き、稲こづみをつくる前作業の下に4束、上に3束の稲束を作るのが子ども仕事でした。ずっとかがんでする仕事で、腰が痛くなり「腰の痛かあ～」と言えば、大人からは「どこに腰のあつかい」と冷やかされていました。その時期のおやつは、リンゴと蒸かしたサツマイモが定番でした。秋も深まり、祭りが近づくと堀を干して鮎を捕り、それを母が昆布巻きにして何日も七輪で炊いていました。骨まで柔らかくて、今でも食べたい一品です。

冬は凧あげです。今の凧とは比べものにならないほどの大きな凧を自分たちで竹を割って作ります。凧をあげた時に手に伝わってくる何とも言えない振動が楽しく、寒いのも忘れて走り回って遊んでいました。

これが私の子供のころの春夏秋冬です。

家庭の食中毒予防

8月5日 公民館主催
いきいき楽しもう会第5回

佐賀県ヤクルト販売株式会社の管理栄養士、坂本さんから「食中毒について」をテーマにお話を頂きました。食中毒は6月から8月に多く発生しているそうです。また、エコバックを利用されている方は汚れが付着しやすいので常に清潔にしておきましょうと話されていました。

参加者からの質問も多く、役立つ講座と好評でした。



夏休み子ども教室

7月26日～7月30日
公民館主催

大詫間小学校の児童32人が参加し、地域の方や中学生に質問しながら5日間熱心に机に向かい自主学習に取り組みました。地域の方から大詫間の歴史を学ぶ時間もありました。公民館から太陽系の惑星や平家物語の序文などの少し難しい暗記課題を出しましたが次々に覚えて暗唱し、大人を驚かせてくれました。最終日は頑張ったご褒美としてかくれんぼや水遊びを楽しんだ後は、食改協の皆さんによる美味しい夏野菜カレーを食べてどの児童も笑顔いっぱいでした。この経験が夏休みの良い思い出となってくれる事を願います。



館長コラム

“いけー、やった～”、“ぶあっ！、あ～あ～”

日本で56年ぶりのオリンピックは、コロナのため開催の是非を巡って意見が分かれました。開催期間中、我が家のパブリックビューイング(?)前は大きな声援と拍手、そしてため息に包まれます。

歳をとったせいか涙腺がゆるくなり、選手の喜びの涙や悔し涙、また表彰式で日の丸が掲げられる場面を見ると目頭が熱くなります。特に目標に届かず涙する姿には胸が打たれます。血のにじむような努力してきたからこそその悔しさかと察します。困難と混乱の中での大会で思うように練習もできず、コンディションやモチベーションを維持していくのは大変だったと思います。平時の中での大会でなかったことが残念でなりません。

クマゼミの鳴き声がつつクボウシの鳴き声に変わり、夏の終わりの気配を感じさせます。残暑は続きますが、それでも季節は少しずつ秋に移っていきます。

どうか台風がきませんように、そしてコロナが早く収まりますように。